

群 教 七	F09 - 01
	平22.242集

学習への適応感を高める学び合い

— 授業をユニバーサルデザイン化する視点に立った

ソーシャルスキル教育を中心として —

長期研修員 齊藤 靖則

《研究の概要》

本研究は、よりよい人間関係のもとでの学び合いによって「学習への適応感」を高めることをねらった実践である。まずは、互いのよさなどを認め合うために、学級活動や帰りの会でソーシャルスキルを学んだ。そして、「学習への適応感」が高まるように、学んだソーシャルスキルを教科の授業で活用した。なお、どの児童もソーシャルスキルのよさや使い方が理解できるように授業をユニバーサルデザイン化する視点に立って授業実践を行った。

キーワード 【コミュニケーション 学級集団 学習環境 グループ学習 小学校】

I 主題設定の理由

生徒指導提要（平成22年3月）では、自分の勉強や進路について不安や悩みを抱える子どもが増加傾向にあり、「分かる授業の成立」が生徒指導上でも重要だと述べている。また、小学校学習指導要領解説総則編の学級経営と生徒指導の充実にかかわる内容には、「分かる喜びや意義を実感できない授業は児童にとって苦痛であり、児童の劣等意識を助長し、情緒の不安定をもたらし、様々な問題行動を生じさせる原因となることも考えられる」とある。

一方、「よりよい人間関係づくり」も生徒指導において重要である。社会状況が変化する中で人とかわる経験が減り、人間関係を築くことを苦手とする子どもが増えている。小学校学習指導要領解説総則編には、「教師と児童の信頼関係および児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深め、生徒指導の充実を図ること」と人間関係づくりの大切さが示されている。また、平成22年度群馬県学校教育の指針では、「互いを認め合い高め合う学級づくり」が生徒指導の重点の一つである。

実践協力校の五年生では、子どもたちが抱えている課題として、「分かる授業の成立」と「よりよい人間関係づくり」に関係することが、学級担任から多く挙げられていた。例えば、「集中力が続かない」「『できない』とあきらめてしまう」などの授業中にかかわることである。また、「言いたいことが話せない」「友達が傷つくことを言うてしまう」などの友達関係にかかわることである。これらの課題に対しては、一人一人に応じた支援が必要である。しかし、友達との上手なかかわり方について教師が一对一で時間をかけて対応したり、計算問題を減らしたプリントを用意したりなどの特別な個別の支援を必要とする子どもがいること、また、一斉指導の中でのさりげない支援が必要な子どもたちの数が多いことから、十分な対応が難しいと学級担任は話していた。

学級の人間関係と授業には関連がある。なぜなら、人間関係がうまくいっている中での授業では、学習の成果やがんばりなどを認め合って学び合うことができる。この場合、授業のねらいを達成する中で、例えば、「進んで勉強できる」「勉強が分かって楽しい」などの「学習への適応感」を高めることができる。しかし、授業が成立する上で当たり前とされていた学級での人間関係を子どもたちが築けなくなっている。そこで、ソーシャルスキル（人と上手にかかわる技能）を学級全体で学ぶことにより、互いのよさなどを認めて学び合えるようになり、教科の授業で学習への適応感が高まることにつながると考えた。また、友達と上手にかかわれない子どもに対する個別支援だけでなく、学級全体の子どもたちがソーシャルスキルのよさや使い方を理解できるように、授業をユニバーサルデザイン化する視点に立つことが重要であると考えた。

授業のユニバーサルデザイン化とは、発達障害を抱えているなどの特別な個別の支援を必要とする子どもにとって有効な支援が、学級全体の子どもたちにとっても役立つ手立てになると考えた授業づくりである。先行研究では、教材等の工夫による学習面での有効性が明らかにされている。

本研究では、授業をユニバーサルデザイン化する視点を教材などの工夫だけでなく、学び合う人間関係に

も目を向けて、ソーシャルスキル教育を実践する。さらに、学んだソーシャルスキルを教科の授業で活用し、友達と上手にかかわって学び合うことが授業のねらいを達成し、その中で学習への適応感が高まると考えて本主題を設定した。

II 研究のねらい

授業をユニバーサルデザイン化する視点に立って構想したソーシャルスキル教育が、どの児童も互いを認めて学び合い、授業のねらいが達成でき、学習への適応感が高まったと感じるために有効であるかを明らかにする。

III 研究の見通し

- 1 学級活動や帰りの会で、授業をユニバーサルデザイン化する視点に立ったソーシャルスキル教育を計画・実践することによって、児童が互いのよさなどを認め合えるであろう。
- 2 教科の授業で、学習したソーシャルスキルをグループ学習の場面で活用することによって、児童が授業のねらいを達成し、その中で学習の適応感を高めることができるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 「学習への適応感」とは

「学習への適応感」とは、本人が授業中に学習が良好であると感じていることを表す。例えば、「勉強のやり方が分かる」「進んで勉強できる」「勉強が分かって楽しい」「次の時間の勉強も分かりそうだ」などと実感できることである。授業で「学習への適応感」がもてないことは、子どもたちにとって苦痛となり、そのストレスや自信喪失がいじめや不登校などの問題行動につながる場合もある。つまり、子どもたちが「学習への適応感」を高めることは授業中の生徒指導として重要である。本研究では、共に学ぶ子ども同士の関係を重視していく。授業で学ぶ子ども同士が互いに認め合える関係であれば、学習のねらいにせまれる中で学習への適応感を高めることができると考える。

(2) 授業をユニバーサルデザイン化する視点に立ったソーシャルスキル教育とは

友達と上手にかかわるためには、ソーシャルスキルを学ぶことが有効であると考えた。ただし、一部の子どもだけが学んだソーシャルスキルでは他の子どもに理解されず、学級で役立たない場合がある。学級全体でソーシャルスキルのよさや使い方を共有することが、ソーシャルスキルを身につけたり、さらに上手に使えたりすることにつながる。そこで、「授業をユニバーサルデザイン化する視点」に立ち、友達と上手にかかわれない子どもに必要なソーシャルスキルが、学級全体の子どもにも役立つという考えによるソーシャルスキル教育を実践した。

① 授業計画の段階で授業をユニバーサルデザイン化する方法

授業をユニバーサルデザイン化する視点から、友達と上手にかかわれない子どもにとって必要なソーシャルスキルを選んだ。必要なソーシャルスキルを明らかにするために「学級生活で必要とされるソーシャルスキル（CSS）」（河村）を参考にして、友達とのかかわりに関する35項目の質問紙（ソーシャルスキル尺度）を実施した。この結果から、活用できていないと感じている児童が多かった四項目に関係するソーシャルスキルを取り入れた（表1）。

また、授業をユニバーサルデザイン化する視点から四つのソーシャルスキルを学ぶ順序を構成した。友達とのコミュニケーションに課題がある子どもにとって

表1 児童の実態から選んだソーシャルスキル

(ソーシャルスキル尺度の項目→実践するソーシャルスキル教育でのスキル名)	
○「友達のまじめな話は、冷やかさないで聞いていますか」	→「真剣な聴き方のスキル」
○「友達が元気がないとき、はげましていますか」	→「暖かい言葉かけのスキル」
○「グループ学習では、みんなと同じくらい話していますか」	→「グループで話し合うときのスキル」
○「自分だけ意見が違っても、自分の意見を言っていますか」	→「自分の意見をいうときのスキル」

抵抗感なく学べるソーシャルスキルの順序が、学級全体の子どもにとっても学びやすい順序になると考えた。友達と上手にかかわれない子どもの具体的な様子としては、友達に進んで話しかけることを苦手としていることが挙げられていた。子どもたちが進んで話せるためには、「聴いてくれる」「認めてくれる」という安心感をもてることが、まずは必要であると考えた。そこで、友達の感情を理解することにつながる「真剣な聴き方のスキル」と「温かい言葉がけのスキル」を「<ステップ1>相手の気持ちを気にかうソーシャルスキル」として前半に実施する計画を立てる。このことによって、安心して話し合える基盤ができると考えた。その後、自分の気持ちを上手に伝える「グループで話し合うときのスキル」と「自分の意見を言うときのスキル」を「<ステップ2>自分の気持ちや考えを伝えるソーシャルスキル」として後半に実施する計画を立てた。このことによって、抵抗感なく自分の気持ちを伝え合うことにつながると考えた。

このように、本研究では、子どもたちの実態からソーシャルスキルを選択し、学ぶ順序を考えた。

② 授業展開の段階で授業をユニバーサルデザイン化する方法

授業をユニバーサルデザイン化する視点を、ソーシャルスキル教育の授業を展開していく上での手立てにも取り入れた。先行研究では、授業をユニバーサルデザイン化する手立てとして、掲示物やワークシートなど、教材の工夫が主に取られている。しかし、授業では、児童と児童、あるいは教師と児童の人間関係も重要である。そこで、本研究では、どの子どもにも分かりやすい教材等の工夫を授業をユニバーサルデザイン化する「物理的環境」と考え、どの子どもにも学びやすい学級の人間関係を授業をユニバーサルデザイン化する「人的環境」と考えた。本研究では、この「人的環境」も重視して実践をした。授業のユニバーサルデザイン化を成立するには、「物理的環境」と「人的環境」の両輪が大切である。

(3) 学び合いの授業について

① 学級活動と帰りの会（ソーシャルスキル教育）

学級活動や帰りの会にソーシャルスキルを取り入れる。この学習では、ペアやグループでの学び合いを中心として、友達とかかわりながらソーシャルスキルの必要性や使い方を理解させる。このようなソーシャルスキル教育を通じて互いを認め合うことができると考える。

② 教科の授業

教科の授業において、学んだソーシャルスキルをグループ学習の場面で取り入れる。互いに認め合って学び合うことによって学習のねらいを達成し、子どもたちが学習への適応感を高められると考える。なお、本研究では、<ステップ1>のソーシャルスキルを活用する社会科の授業と、<ステップ1と2>を活用する理科の授業を実践する（図1）。

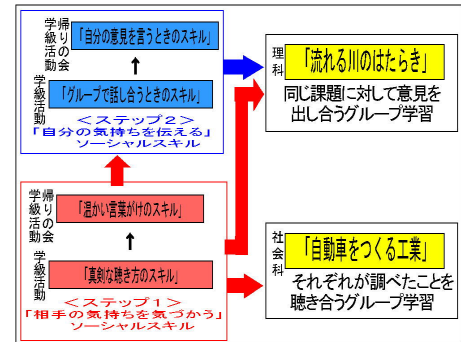


図1 授業の流れ

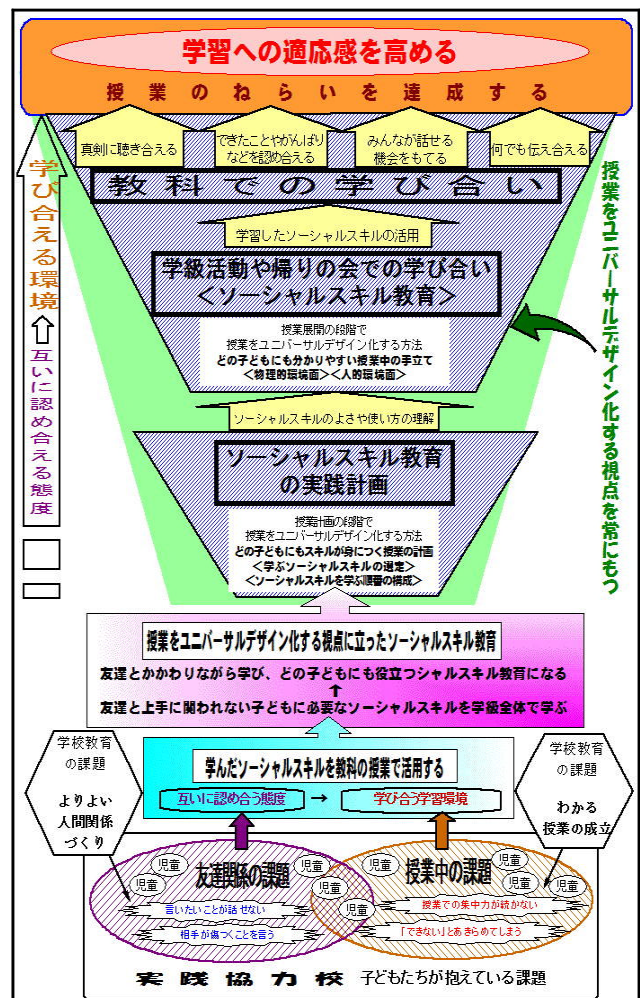


図2 研究構想図

2 研究構想図

本研究の研究構想図を図2に示す。

V 研究の計画と方法

1 実践計画

対象	小学校 5年〇組 (31名)	期間	9月24日から10月20日
時間	学級活動 4時間 教科の授業 2時間 帰りの会 4回	指導者	長期研修員 齊藤靖則

2 検証計画

研究仮説	検証の観点	検証の方法
見通し1	学級活動の授業や帰りの会で、授業をユニバーサルデザイン化する視点に立ったソーシャルスキル教育を計画・実践することは、児童が互いのよさなどを認め合える上で有効であったか。	<ul style="list-style-type: none"> ・事前事後の「アセス」学校環境適応感尺度 ・事前事後のコミュニケーションに関わるソーシャルスキル尺度 ・抽出児の観察記録、抽出児が書いた授業後の感想 ・ビデオによる授業全体の記録 ・学級全体の児童が書いた授業後の感想
見通し2	教科の授業で、学習したソーシャルスキルをグループ学習の場面で活用することは、児童が学習のねらいを達成し、その中で学習への適応感を高める上で有効であったか。	<ul style="list-style-type: none"> ・事前事後の「アセス」学校環境適応感尺度 ・抽出児の観察記録、 ・抽出児が書いたワークシートの記述内容や感想 ・ビデオによる授業全体の記録 ・学級全体の児童が書いたワークシートの記述内容や感想

※抽出児童Aについて

- 自分の言いたいことを相手に伝えられない。友達からの助言に対して素直な返答ができず、トラブルが起きることがある。
- 自分に自信が持てず「どうせだめだ」とあきらめてしまうことが多い。
- 授業への興味が持てず、集中力の続かないことが多い。教師の指示や発問が正しく伝わらず、学習につまずくことがある。

3 指導計画

事前・事後の検査 ソーシャルスキル尺度 アセス

	教科等及び日時	主な学習内容	ねらい	検証の観点
掬いこみをつなぐソーシャルスキル	学級活動 「真剣な聴き方」 9月24日	<ul style="list-style-type: none"> ○上手な聴き方のスキルを知る。 ○ペアになり、一人二分ずつ話をして、聴き方を互いに評価し合う。 〈スキル〉①話し手に体を向けて顔を見る。②話が終わるまで黙って聴く。③タイミングよくうなずく。相づちを入れる。④話が終わったら相手の気持ちを考えた言葉を伝える。 	○人の話に注意深く耳を傾ける大切さに気づき、相手が話しやすく、真剣に聞いていることが伝わるような聴きかたができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・抽出児の観察 ・ビデオによる授業記録 ・授業後の児童の感想
	学級活動 「温かい言葉がけ」 9月28日	<ul style="list-style-type: none"> ○温かい言葉とは何かを知る。 ○ペアやグループで「温かい言葉がけゲーム」をする。 〈スキル〉①相手を見る②温かい言葉=「相手の様子、気持ち、考え」+「自分の気持ち、考え」③やさしい言い方④やさしい表情⑤身ぶりや手ぶり 	○温かい言葉とは何かを知り、温かい言葉がけのよさを感じながら使うことができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・抽出児の観察 ・ビデオによる授業記録 ・授業後の児童の感想
	帰りの会「温かい言葉がけ」 10月4日・5日	<ul style="list-style-type: none"> ○ペアで「温かい言葉がけゲーム」をして言葉をかけ合い、どんな気持ちになるかを話し合う。 	○学んだソーシャルスキルを練習して、日常化に近づける。	<ul style="list-style-type: none"> ・抽出児の観察 ・ビデオによる授業記録
自分の気持ちや考えを伝えるソーシャルスキル	社会科 「自動車をつくる工業」 11/12 10月6日	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に調べた「人や環境にやさしい自動車」をグループで発表し合う。 ○人や環境に優しい観点から、調べたことについて「温かい言葉がけ」のアドバイスをし合う。 ○ふり返りを「上手な話の聴き方」で聴き合う。 	○人や環境に優しい自動車づくりの観点から調べたことを進んで発表し合える。	<ul style="list-style-type: none"> ・抽出児の観察 ・ビデオによる授業記録 ・ワークシート ・授業後の児童の感想
	学級活動 「グループで話し合うときのこつ」 10月8日	<ul style="list-style-type: none"> ○グループで話し合いをするときのポイントを知る。 ○テーマについて司会者が進行しながら四人グループで話し合う。 〈スキル〉①自分ばかり話さない。②黙ったままではない。③自分の番が来たら話す。 	○グループで話し合いをするときには、メンバー全員が同じように発言することの大切さに気づき、友達の話も聴きながら自分も同じように発言して話し合える。	<ul style="list-style-type: none"> ・抽出児の観察 ・ビデオによる授業記録 ・授業後の児童の感想
	学級活動 「自分の意見を言うときのこつ」 10月13日	<ul style="list-style-type: none"> ○「自分の意見を言うときのこつ」を知る。 ○四人グループで、二者択一のテーマについて、自分の意見の言い方を練習する。 〈スキル〉①自分の意見や気持ちを「わたしは〜です。」と言う。②理由を言って、みんなに意見を聞く。 	○自分の考えを伝えることの大切さを知り、お互いにいやな思いをしない意見の言い方ができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・抽出児の観察 ・ビデオによる授業記録 ・ワークシート ・授業後の児童の感想
学級活動「自分の意見を言うときのこつ」 10月14日・18日	<ul style="list-style-type: none"> ○例文を使い、自分の意見の言い方を練習する。 	○学んだソーシャルスキルを練習して、日常化に近づける。	<ul style="list-style-type: none"> ・抽出児の観察 ・ビデオによる授業記録 	
理科 「流れる水のはたらき」 5/12 10月20日	<ul style="list-style-type: none"> ・川の上・中・下流の様子について、川の水の働きと関係づけて話し合う。 ○「話し合うときのスキル」や「自分の意見を言う時のスキル」などを使い、四人グループで話し合う。 	○写真を見比べたり、話し合ったりしながら上流・中流・下流によって、流れる水の速さ量、川幅や石の大きさ等に違いがあることに気付ける。	<ul style="list-style-type: none"> ・抽出児の観察 ・ビデオによる授業記録 ・授業後の児童の感想 	

VI 研究の結果と考察

1 見通し1について

(1) 授業実践 ※指導案や資料は別紙参照

授業展開で授業をユニバーサルデザイン化する主な手だて	
人的環境 ○教師と児童の関係 ・賞賛と肯定的な言葉がけ ○児童と児童の関係 ・既習のソーシャルスキルを活用して互いに認め合える学び合い ・どの児童も友達とかかわり合えるペア・グループ学習 ・支援が必要な児童を配慮したグループ編成	物理的環境 ○視覚情報で伝えるワークシートや掲示物 ・絵と文字を組み合わせ、学習内容や学習の流れをわかりやすく説明 ○自分の考えなどが書いてある作文やワークシート ・学び合いで自分の考えなどを友達に伝えられる材料 ○学習の進め方を掲示 ・学習の進め方が確認できるように、手順をカードで掲示

表1 相手の気持ちを気付かうソーシャルスキル¹ 学級活動「真剣な聴き方」 9月24日実施

<p>学習のねらい 人の話に注意深く耳を傾ける大切さに気づき、相手が話しやすく、真剣に聴いていることが伝わるような聴きかたができる。</p>
<p>「真剣な聴き方のスキル」 ○話す人に体を向けて顔を見る。 ○話を最後まで聴く。 ○タイミングよくうなづく。相づちを打つ。 ○話が終わったら自分の感想などを伝える。</p>
<p>ソーシャルスキル練習の様子（ペア学習） まずは、聴き手が相手の顔を見ない「真剣ではない聴き方」を交代しながら体験した。話しにくそうにしている子どもが多かった。その後、黒板に掲示したスキル説明を確認しながら「真剣な聴き方のスキル」を練習した。タイミングよくうなづくたり相づちを打ったりすることには難しさを感じている子どももいたが、全員の子どもが相手の顔を見ながら話を聴けた。話し手になった子どもからは「もっと話したかった」という声もあった。</p>
<p>振り返りカードの記述（○数字は人数）（複数の子どもが同じ内容であった意見のみ掲載） 話しやすかった② 話してよかった⑬ 嬉しかった⑪ いい気持ちになった⑨ また話したい⑧ 話をよく聴いてくれていると感じた④ 言いたい言葉がすぐに出てきた② 自分の話を分かってくれていると感じた②</p>

表2 相手の気持ちを気付かうソーシャルスキル² 学級活動「温かい言葉がけ」 9月28日実施

<p>学習のねらい 温かい言葉とは何かを知り、温かい言葉がけのよさを感じながら使うことができる。</p>
<p>「温かい言葉がけのスキル」 ○相手を見る ○温かい言葉＝「相手の様子」＋「自分の気持ち、考え」 ○やさしい言い方 ○やさしい表情</p>
<p>ソーシャルスキル練習の様子（四人グループ学習） 学校生活の様々な場面を表したカードをそれぞれの子どもが持ち、それに対して温かい言葉がけを行った。どのグループも黒板に掲示した進め方の手順を確認しながらスキル練習をしていた。言葉がけができずに黙ったままの子どもはいなかった。始めは硬い表情で話す子どもが多かったが、段々と和らいた顔で話せるようになってきた。 ※「言葉がけカード」を使った「温かい言葉がけのスキル」練習は、10月4日と5日の「帰りの会」でも実施。</p>
<p>振り返りカードの記述（○数字は人数）（複数の子どもが同じ内容であった意見のみ掲載） 言われて気持ちがよかった⑭ 失敗しても諦めなくなる（嬉しくなる）⑥ 言われた方も言った方も嬉しくなる（気持ちよくなる）⑤ これからも使っていきたい⑤ 相手が喜ぶんだと思った④ 温かい言葉はたくさんあってびっくりした②</p>

表3 自分の気持ちや考えを伝えるソーシャルスキル¹ 学級活動「グループで話し合うときのこつ」 10月8日実施

<p>学習のねらい グループで話し合いをするときには、メンバー全員が同じように発言することの大切さに気づき、友達の話も聴きながら自分も同じように発言して話し合える。</p>
<p>「グループで話し合うときのスキル」 ○自分の番になったら話す。 ○みんなと同じくらい話す。 ○司会者が次の人に「では、～さん（君）どうぞ」と伝える。</p>
<p>ソーシャルスキル練習の様子（四人グループ学習） 「グループで話し合うときのスキル」を使って「動物カードの席がえゲーム」をした。司会者が指名し、全員が自分のカードに書いてある情報を伝えることができた。どのグループも友達が話す内容を聴き漏らさないように頭をつき合わせて情報を伝え合っていた。全部のグループが時間内に動物の座席を正しく完成させることができた。座席が正しく完成できていることを授業者がグループに伝えると、多くの子どもが「やったあ」と大きなリアクションで喜びを表していた。</p>
<p>振り返りカードの記述（○数字は人数）（複数の子どもが同じ内容であった意見のみ掲載） みんなと同じくらい話せた⑬ 協力しないとできないことがやってみて分かった⑧ これからも意見が言いたい⑧ カードの席がえが楽しかった⑦ 司会で話が進められてよかった⑥ みんなと協力できた⑥ 真剣な話の聴き方も出来た⑤ 真剣に聴いてくれる人がいて話しやすかった③ みんなに情報が伝えられてよかった② 今日はたくさん話せてよかった②</p>

表4 自分の気持ちや考えを伝えるソーシャルスキル² 学級活動「自分の意見を言うときのこつ」 10月13日実施

学習のねらい 自分の考えを伝えることの大切さを知り、お互いによい思いをしない意見の言い方ができる。
「自分の意見を言うときのスキル」 ○アイメッセージ<「私（ぼく）は～と思う。」のように、まず、自分の意見や気持ちを言う> ○理由と質問「理由は、～だから。みんなは、どう思う？」
<p>ソーシャルスキル練習の様子（四人グループ学習）</p> <p>「委員長になりたいか・副委員長になりたいか」などの二者択一をする問題から選んだことを「自分の意見を言うときのスキル」で話した。司会者を代えながら違うテーマで練習を重ねていく中で、スキルを使った伝え方が言えるようになってきた。スキルが正しく使えない友達に対しては、以前に学習した「温かい言葉がけのスキル」を意識して優しい言い方でアドバイスしている子どもの姿が見られた。聴く立場のときには「真剣な聴き方のスキル」を意識して聴けている子どもが多かった。どのグループも全員の子どもが司会者役を経験して話し合えた。</p> <p>※二者択一による「自分の意見を言うときのこつ」のスキル練習は、10月14日と18日の「帰りの会」でも実施。</p>
<p>振り返りカードの記述（○数字は人数）（複数の子どもが同じ内容であった意見のみ掲載）</p> <p>これからも自分の意見が言いたい^⑩ 自分の意見が言えてよかった（気持ちよかった）^⑦ アイメッセージを使えた^⑦ 自分の意見を言うことは大切だと思った^⑤ 他の人が発表するのを聞いた^④ アイメッセージが分かってよかった^③ みんなが真剣に聴いてくれたので意見が言いやすかった^③ 自分の意見を言っても相手が分かってくれるんだと思った^②</p>

(2) 授業の考察

授業をユニバーサルデザイン化する視点から、友達と上手にかかわれないと感じている子どもたちに必要なソーシャルスキルを選択し、学ぶ順序を計画した。後半の「自分の気持ちを伝えるソーシャルスキル」を学ぶときには、前半で「相手の気持ちを気付かうソーシャルスキル」を学んだことにより、聴いてもらえる安心感をもって自分の気持ちを伝え合う子どもたちの姿を見ることができたと考える。

授業をユニバーサルデザイン化する物理的環境面では、イラストで表したソーシャルスキルの説明や学習の手順をカードにして掲示したことにより、説明などが短時間で伝わり、スキル練習の時間を十分に確保できた。人的環境面では、スキル練習をペアや小グループで取り組んだために、一人一人の子どもが話す機会を増やせた。また、友達とかかわることを苦手と感じている子どもに配慮したグループ編成が、互いをモデルとしてソーシャルスキルを学ぶことにつながったと考える。

授業の振り返りでは、多くの子どもたちが、ソーシャルスキルのよさを実感している記述があった。今後、学んだソーシャルスキルを自主的に活用する態度につながると考える。

このように、授業をユニバーサルデザイン化する視点からソーシャルスキル教育を実践したことが、どの子どもも友達と上手にかかわるよさを理解し、認め合える態度を表すことにつながったと考える。

(3) 抽出児童Aの様子

授業実践の一時間目では、Aのスキルに対する自己評価は、学級で最も低かった。しかし、この授業の振り返りの場面では、学級全体の前で感想を発表し、友達から拍手をもらって嬉しそうであった。この表情を見て、今後も友達と認め合える経験を重ねていけば、自分に自信を持てるであろうと思った。その後の授業では、進んでスキルを使い友達と学び合う姿が見られた。スキルの自己評価では、全ての項目に「できた」を選択することも出てきた。Aは友達との学び合いを通して、ソーシャルスキルを使えた自信を持てたと考える。

(4) ソーシャルスキル尺度の結果

図3～5は、授業実践をしたソーシャルスキルにかかわる四項目の尺度について、一回目（実践の事前7月9日）と二回目（実践の事後10月25日）の結果をグラフにしたものである。図3は、ソーシャルスキルを活用できて

いると感じている
（「いつもしている」「ときどきしている」を選択した）各項目の児童数を表している。どの項目についても、二回目の方が

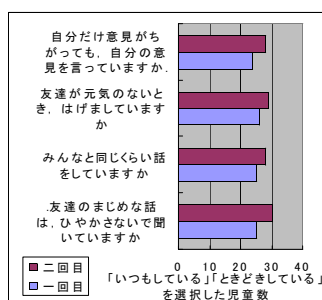


図3 スキルを活用できていると感じている児童数

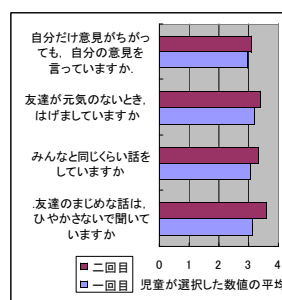


図4 ソーシャルスキル尺度の学級平均

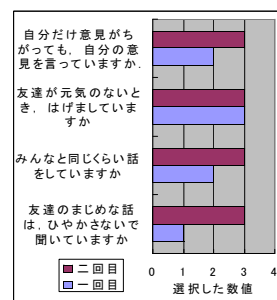


図5 抽出児童Aのソーシャルスキル尺度

ソーシャルスキルを活用できていると感じている児童数が増えている。図4は、ソーシャルスキル尺度の学級平均である。(子どもたちが選択した数値は、「いつもしている」→4、「ときどきしている」→3、「あまりしていない」→2、「ほとんどしていない」→1である。) 四項目とも二回目の数値が高い。図5は、抽出児童Aのソーシャルスキル尺度を表したグラフである。学級の平均より高い数値ではないが、Aの個人結果を比較すると三項目で数値が高くなっている。グラフの事前と事後の結果を比較すると、学習したソーシャルスキルについて活用できている児童が増えたと考えられる。

(5) 担任による実践後の観察(生活面の様子)

- 月別の生活目標では、「温かい言葉がけ」をクラス目標にすることが全員一致で決まった。学んだソーシャルスキルを大切に考え、進んで使っていこうとする姿勢が表れている。
- 今までは、休み時間等で友達がふざけていると、「ふざけるなよ!」などの言葉を強い口調で注意する子が多かった。最近は、同じような状況のときに「やめた方がいいよ」などの優しい言葉を柔らかい口調で伝える子が見られるようになってきた。

担任による事後の観察からは、授業後も学んだソーシャルスキルを意識したり活用したりする様子が挙げられていた。学んだスキルを授業後も意識できている理由としては、スキルを教室掲示したり、帰りの会でスキル練習を繰り返したりなどの外側からの働きかけもあるが、ソーシャルスキル教育の授業を通じて、子どもたち自身がソーシャルスキルのよさを理解して使えているためであると考えられる。

2 見通し2について

(1) 授業実践 ※指導案や資料は別紙参照

表5 社会科「自動車をつくる工業」12/12 10月6日実施

学習のねらい 人や環境に優しい自動車づくりの観点から調べたことを進んで発表し合える。
授業で活用したソーシャルスキル <相手の気持ちを気付かうソーシャルスキル> ○「真剣な聴き方のスキル」 ○「温かい言葉がけのスキル」
学び合いの様子 (三人グループ) 「人や環境にやさしい自動車」の技術や研究について各自が調べたことをグループで発表し合った。グループの中には「環境」「安全」「福祉」の異なるテーマを調べた児童で編成し、各自が調べていないテーマの内容も発表から分かるようにした。調べたことを一人一人が順番に発表した。「真剣な聴き方のスキル」を表した態度で聴き、一回の発表で聴き取れなかったことは、何度も聴き直しながらワークシートの記述内容を詳しくしていく子どもたちの姿が、どのグループでも見られた。発表から分かったことや思ったことなどを、発表を聴いた一人一人の子どもが「温かい言葉がけのスキル」で発表者に伝えていた。すぐに感想が言えない子どもも掲示した具体例を参考にすることによって話せていた。

表6 理科「流れる水のはたらき」5/12 10月20日実施

学習のねらい 写真を見比べたり、話し合ったりしながら上流・中流・下流によって、流れる水の速さ量、川幅や石の大きさ等に違いがあることに気付ける。
授業で活用したソーシャルスキル <相手の気持ちを気付かうソーシャルスキル> ○「真剣な聴き方のスキル」 ○「温かい言葉がけのスキル」 <自分の気持ちを伝えるソーシャルスキル> ○「グループで話し合うときのスキル」 ○「自分の意見を言うコツ」
学び合いの様子 (三人グループ) 個人で調べて気付いた上・中・下流の特徴をグループで話し合った。「グループで話し合うときのスキル」を活用して司会者が全員を指名したため、どの子どもも意見を言う機会が持てた。教室に掲示したスキル内容を確認するなどによって、子どもたちは「自分の意見を言うときのスキル」を使って発表できていた。友達が発表しているときには、相手の顔を見たり、うなずいたりなど、「真剣な聴き方のスキル」を意識して聴いている様子が見られた。一人一人の発表が終わると感想を「温かい言葉がけのスキル」で伝え合っているグループもあった。「穏やかに流れている」という意見を言った子どもに「穏やか」の意味を尋ねるなど、分からないことを進んで質問し合うグループでの姿が見られた。



グループ学習の様子

(2) 授業の考察

社会科のグループ学習では「真剣な聴き方のスキル」を使って発表を聴き合えたため、聴く子どもが発表内容をよく理解できた。また、発表する子どもは真剣に聴いていることを実感したため、進んで発表できたと考えられる。さらに、発表に対して「温かい言葉がけのスキル」で肯定的な感想を伝え合えた。

理科のグループ学習では、「グループで話し合うときのスキル」によって司会者が進行しながら一人一人の子どもが話せる機会を持てた。さらに「自分の意見を言うときのスキル」によって自分が気付いたことを伝えることができた。また、「真剣な聴き方のスキル」で聴く態度を表すことが、安心して意見が言える気持ちにつながっていたと考える。友達が気付いたことに対しては、「温かい言葉がけのスキル」で肯定的な感想を伝え合えた。

以上のように、社会科でも理科でも、子どもたちはグループ学習で身につけたソーシャルスキルを活用し、お互いが調べたことや気付いたことなどを認め合える態度で学習できたと考える。

(3) 抽出児童Aの様子

Aは、社会科のグループ学習で、わざと大げさにうなずく様子が見られたが、しだいにうなずきながら友達の発表を聴く態度に変わってきた。「真剣な聴き方のスキル」を使う友達の態度がAのモデルになったと考える。Aは真剣に聴く態度で取り組めるようになったため、発表内容を理解してワークシートに記述できた。「片手が不自由な人も運転できる車には、ハンドルにノブが付いている」「環境にやさしい車には、『ハイブリッドカー』のほかに『電気自動車』や『水素自動車があります』」など、分かったことを詳しくワークシートに書けた。理科のグループ学習では、「自分の意見を言うときのスキル」を使って話すことができた。聴いた友達からは「調べたことが自分の勉強になった」という感想があり、嬉しそうな表情で聴いていた。振り返りの感想には、「上流の流れる水の速さは、中流や下流より速い」などの分かったことが書かれていた。以上のように、ワークシートに詳しく記述できた様子から、Aは学習のねらいを達成できたと考える。また、振り返りカードに授業で分かったことが書けていたことや友達に自分の意見を認められて嬉しそうにしていた姿からも、Aは友達と学び合う中で学習への適応感が高まったと考える。

(4) ソーシャルスキルの自己評価

社会科や理科の授業で既習のソーシャルスキルを活用できたかについて自己評価をさせた。ソーシャルスキル教育を実施した学級活動と教科の授業の自己評価を比較すると、学級活動で自己評価が高い項目は、教科でもほぼ同じ結果となっていた。また、学級活動で自己評価が低かった項目は、図6の「温かい言葉がけのスキル」にある項目「優しい表情」のように、教科では高い評価になってきている。以上の結果から、子どもたちが学級活動や帰りの会で学んだソーシャルスキルを教科の授業で活用できていると考えられる。

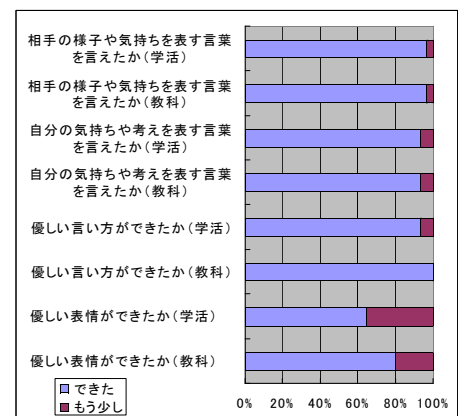


図6 学級活動と教科における「温かい言葉がけスキル」の自己評価比較

(5) ワークシートやふりかえりカードの記述

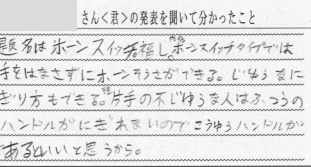
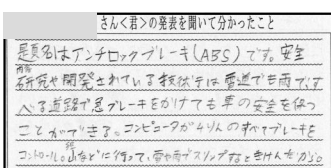


図7 社会のワークシート例

社会科では、図7のように、同じグループで発表し合った二人の友達から分かった自動車づくりのことを全員の子どもがワークシートに書けていた。授業後の振り返りでは、表7のように、授業を通じて「できたこと」「分かったこと」「嬉しかったこと」などを全員の子どもが書いていた。

表7 社会科の振り返りカードの記述(多かった感想のみ掲載)○は人数

温かい言葉がけで感想が言えた⑩ 友達の発表を聴いて今まで知らなかったことが分かった⑫ 感想を言ってもらえて嬉しかった⑪ 真剣な聴き方で発表が聴けた⑩ 相手が分かりやすいようにゆっくりはっきり発表できた⑧ 友達がゆっくりはっきり発表してくれたので聞きやすかった⑥ 真剣に聴いてくれて嬉しかった④
--

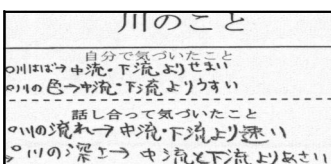


図8 理科のワークシート例(一部)

理科では、図8のワークシートのように、グループの話し合いから、川の様子について気付いたことを増やせた子どもが29人中24人いた。その他の子どもが話し合いで気付いたことを書いていなかったのは、すでに自分で気付いたことを四つ以上見つけていたためである。また、授業の振り返りでは、表8のように、全員の子どもが、川の様子について分かったことがあったと書いていた。その中でも、グループの話し合いによって新しい

ことに気付けたと書いていた子どもが多かった。

以上のように、社会科では、進んで発表し合い、意見交換をできたことがワークシートから分かる。理科では、グループでの

表8 理科の振り返りカードの記述（多かった感想のみ掲載）○は人数

川幅や水の流れの速さなどの違いが分かった②③ みんなで話し合うと自分が気づかなかった意見がでてきて分かったことがあった② 中流などの用語を知った④ 川のことをみんなに話したり聞けたりしてよかった② 川のことを深く考えられた② 川のことについて考えが広がった② 実際に川へ行ってみたいくなった② 司会がよくできた②

話し合いを通じて様々なことに気付けたことがワークシートから分かる。このように、どちらの授業でも、ソーシャルスキルを活用したグループでの学び合いによって、学習のねらいを達成できたと考えられる。また、授業の振り返りでは、進んで学習に取り組めたことや新たに分かったことを全員の子どもが記述していることから、どの子どもも学習への適応感を高めることができたと考える。

(6) 担任による事後の観察(学習面での態度)

- 授業中は、教師や友達の話を楽しみながら聴いている子が多くなった。
- グループでの話し合いなどでは、自信を持って自分の意見を言える子が多くなってきたと感じる。前半に「相手の気持ちを気づかうソーシャルスキル」を学習したことが後半の「自分の考えを伝えるソーシャルスキル」を使って意見が言えるようになってきていると子ども達の様子から実感した。

担任による事後の感想からは、実践後も、子どもたちが学んだソーシャルスキルを授業で活用できていることが分かる。また、担任の感想からは、実践の前半に学習した「相手の気持ちを気づかうソーシャルスキル」を身につけたことによって、子どもたちが話しやすさを実感し、「自分の考えを伝えるソーシャルスキル」を実践後の教科の授業でも進んで活用できていることも分かる。つまり、授業をユニバーサルデザイン化する視点から、友達とのコミュニケーションに課題がある子どもへの支援となるソーシャルスキルの選択や学ぶ順序の構成をしたことが、学級全体の子どもたちにも役立ち、事後も教科の授業でソーシャルスキルを活用できることにつながっていると考えられる。

(7) 学校環境適応感尺度「アセス」(学習的適応と対人的適応について)の結果

実践前と実践後に学校環境適応感尺度「アセス」を実施した。「アセス」の一回目（授業実践前）の結果が図9、二回目（授業実践後）の結果が図10である。数値が40未満の領域は、支援が必要な目安として色を変えている。横軸の学習的

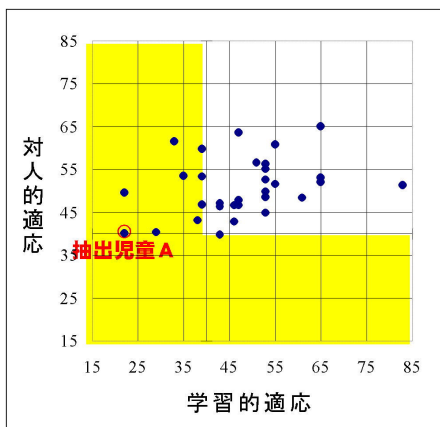


図9 事前の「アセス」分布図

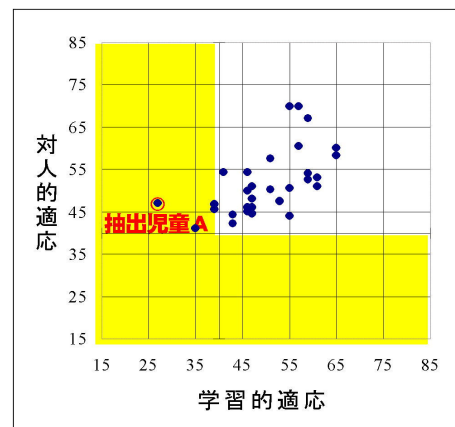


図10 事後の「アセス」分布図

適応を比較すると、図9では支援が必要とされる領域に分布されている児童が多いが、図10では減少している。また、縦軸の対人的適応を比較すると、最も低い数値の児童も最も高い数値の児童も図10の方が高い位置にいる。以上のように、クラス全体の分布としては、実践前と比較すると実践後の結果が右上に変化しており、学級の人間関係と学習の両面で適応感の高くなった子どもたちが増加していることを示している。この結果からも、対人関係の適応感を高めれば、学習への適応感が高まると考える。

VII 研究のまとめ

1 成果

- 授業をユニバーサルデザイン化する視点から友達とかかわることを苦手と感じている子どもたちに

必要なソーシャルスキルを学級全体で学び合ったことによって、どの子どもたちも相手の気持ちを考えた態度を表し、自分の気持ちを上手に伝えられる上で効果的であった。

- 人的環境面における授業をユニバーサルデザイン化する手立てとして、友達とかかわることを苦手と感じている子どもたちに配慮したグループ編成でソーシャルスキルを学んだことは、互いをモデルとしてソーシャルスキルのよさを実感したり、使い方を理解する上で効果的であった。
- 人的環境面における授業をユニバーサルデザイン化する手立てとして、ペア学習や少人数でのグループ学習をする場面や時間を多く設けたことによって、どの子どもたちも話す対象をはっきりさせて意欲的に学習できた。
- 教科のグループ学習では、ソーシャルスキルを活用することによって、互いの調べたことや気付いたことを伝えたり認め合えたりすることができ、どの子どもたちも授業のねらいを達成する中で学習への適応感を高めることができた。

2 課題

- 今回は約一カ月の実践期間にもかかわらず、ソーシャルスキルが活用できている子どもが増えてきた。ソーシャルスキルを活用する期間が増えれば、スキル活用の機会を重ねたり、互いがモデルとなって学び合えたりする中で、さらにソーシャルスキルを身につける子どもが増えていくと考える。
- 今回は、グループ学習でソーシャルスキルを活用した教科の授業を二時間実践した。さらにソーシャルスキルを活用できる授業を増やしていけば、ペアやグループ学習から一斉学習へと、ソーシャルスキルを活用して学び合う場を広げていけると考える。

3 実践を終えて見えてきたこと

実践協力学級（五年）で実施したソーシャルスキル尺度を実践協力校の四学年から六学年の全児童（260人）にも実施した。友達とかかわり合いに関する主な項目を協力学級と各学年別に比較したグラフが図11である。グラフでは、各項目のソーシャルスキルについて、活用できていないと感じている児童の割合を表している。★は、協力学級で活用できていないと感じている児童が多かったため、実践で選択したソーシャルスキルの項目である。グラフを見ると、各学年の傾向は、協力学級の傾向と共通する項目が多い。つまり、子どもたちの実態を考慮した場合、高学年を中心とした多くの学級において、今回に実践した四つのソーシャルスキルの活用が有効であると考えられる。また、本研究では、社会科と理科で実践したが、他教科での様々な場面でも、ソーシャルスキルを活用できると考える。そこで、実践した指導案と共に、本研究で選んだソーシャルスキルを活用し、授業をユニバーサルデザイン化する視点に立った教科の指導案例を挙げる（別添資料参照）。

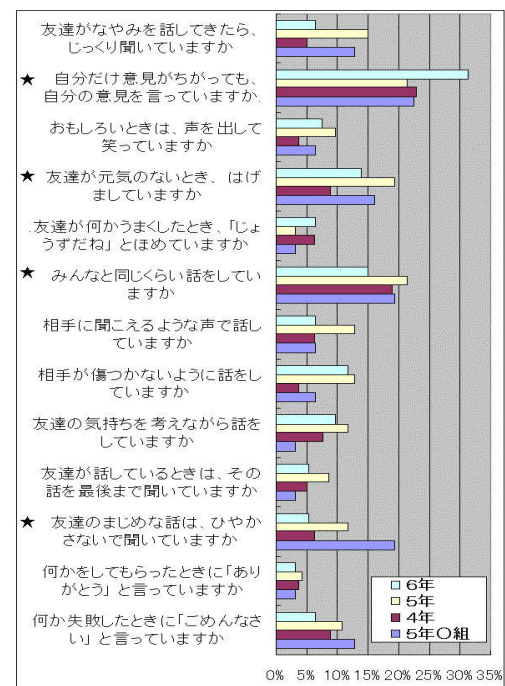


図11 スキルを活用できていないと感じている児童数の比較

<参考文献>

- ・全日本特別支援教育研究連盟 編 『通常学級の授業ユニバーサルデザイン』 日本文化科学社 (2010)
- ・河村 茂雄 編著 『グループ体験によるタイプ別学級育成プログラム小学校編』 図書文化 (2001)
- ・河村 茂雄他 編著 『いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル小学校高学年』 図書文化 (2007)
- ・日本学校GWT研究会 編著 『学校グループワークトレーニング3』 遊戯社 (2004)
- ・栗原 慎二・井上 弥 編著 『月刊学校教育相談アセスの使い方・活かし方』 ほんの森出版 (2010)